

巻頭エッセイ

「私のスキー歴」



一般財団法人民事法律協会顧問 新堂 幸司

私がスキーをやり出したのは、55歳の時である。その詳しいいきさつは、いまでは記憶が曖昧ですが、なんでも東急不動産系（かどうか今はもうあいまいな記憶でしかない）のリゾート部門の開発ブームがあり、その部門の売り子（一度も会ったことはないが、二十歳前後の若々しい声の持主であった女性）に勧められて、熱海の山の眺めのよい別荘地を買うことにした。その時は、現地を見に行くほどの関心はなかったところ、しばらくして、また同じ売り子さんから電話連絡があり、新潟県の岩原スキー場にある山荘の一室を買わないかという買換えを勧める電話連絡が入った。その時は、まさか自分がスキーをするとは思わなかった。しかし、実際にそのスキー場を見に行き、若者たちが楽しそうに滑っているのを見たときに、自分もやってみたいと思ったのです。なにしろ、時は“私をスキーに連れてって”というスキーブームの時代だった。ちなみに、先に買った熱海の土地の方は、あとになって不良な埋立てのため地滑りがおこり大変な目にあうところであったが、この災難は免れることができた。まさに塞翁が馬ですね。

さて、スキーを習うと言っても、50を過ぎた爺が若者と一緒に習うには気が引けた。そこで、テレビやビデオにすがった。しかし、これがいけなかった。

そもそもスキーが楽しめるというレベルがどれくらいの熟達度を言うのか、いまもって分からないのである（若者たちが1級や2級に合格したとか言っているのを聞くと、それらしいものがあるようだが）。去年のシーズン中のことであるが、ある時ふと、ストックを付く時点をちょっと前倒しにしたら、ずいぶんスムーズに回転することができた。ああ！こんな、なめらかな回転方法があったのかと、自分でもびっくりした。こんなこともあるかと思うと、やっぱりスキーは楽しいと、つくづく思うのです。

ところで、いま私は、92歳と10カ月であり、昨年には運転免許証を返納したばかりである。しかし、以前は大の運転好きでした。その頃は、夏スキーも毎年の行事であったし、世界中のスキー場を楽しんでいた。カナダ、ニュージーランドなどのヘリスキー、マッターホルンでのスキーなども楽しい思い出となっている。

このごろは“人生100までは”と言われる時代であるが、やがてはヘタレて、お迎えがくるのは確かである。そこで、私の死亡通知がお手元に届くまでは、私、新堂は毎日人生の最後を楽しく過ごしていると御理解いただき、あれこれの連絡は一切省かせていただき、紙の節約に貢献したいと考えます。今の私としては、このくらいのこと

としか世の中のために貢献できないと心得ております。そんなわけで、毎年スキーシーズンが始まる時期には、去年のシーズンからどれくらい体力が落ちているのかを周到に調べる必要があります。これは理屈ではありません。実際に、そろりそろりと試し

滑りをやるほかはない。そして、「ここまでまだできるか」と思うと、これがまた、私の心をなんともウキウキドンドンさせるのです。どうやら、バカは死ななきゃ治らないとは、よく言ったものだと思いつく思う次第です。

